

私の紙面批評

弁護士

清源 万里子

今年4年に1度のオリピック、パラリンピックがブラジルのリオデジャネイロで開催された。本紙はカラー写真をふんだんに使い、選手たちの活躍を連日報道した。

9月20日の朝刊は「障害を超えた一体感」の見出しを掲げ、選手と観客、ボランティアーが一体となり、障害の有無を超えた人々の

選手たちの活躍と感動を紙面で読者に伝えてほしい。これまでの連載で、脊椎曲をカバーするデザインの洋服を着て何度もポーズを取った逸話や、脊髄性筋萎縮症のために電動車椅子で生活している女性が、母の着物を軽量化した振り袖を着て喜んだことなど、心の温まる話が数多くつづられている。「服」を通して、

情報 多角的に伝えて



(きよもと・まりこ) 1981年、中津市生まれ。2008年弁護士登録。11年大分県弁護士会入会。九州弁護士会連合会・犯罪被害者の支援に関する連絡協議会委員。現在子育て真っ最中。

体にハンディのあることが社会参加の壁となつてはいけない、という鶴丸さんの熱い思いが、この連載にあふれている。

つながり”を生み出したと報じた。競技会場や五輪公園で、多くの障害者がボランティアなどのスタッフとして大会を支えたことも紹介。冬季パラリンピック長野大会のメダリストが「『かわいいそんな人たちがあつたら、あんなふうに盛り上がるのがない』と述べているのは大変印象的だ。今後も

色を見たことがない視覚障害者が色の名称を教えるのをコンセプトに、視覚に障害がある女性が着用するカットソーに「コバルトブルー」の色を表す点字と同一配列になるよう、袖口、裾、肩にピンクに光るライオンストーンを付けたエビソッドを紹介されていた。カッソーを着て写真に納ま

本紙が「スポーツ」や「服」といった読者になじみやすい分野の報道を通して、「共生社会実現」の必要性について分かりやすく問題を提起していることは評価できる。多くの人に影響力がある新聞だからこそ、これからも重要な課題について、実態や問題提起、啓発、解説などの情報を多角的に分かりやすく県民に提供し続けてほしい。